

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

2019年10月8日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 教授

氏 名 家入 葉子

助 成 の 種 類	<b>31年度 ・ 国際研究集会発表助成</b>		
研 究 集 会 名	21世紀のコンピュータ辞書学		
発 表 形 式	<input type="checkbox"/> 招 待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口 頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他( )		
発 表 題 目	Analysing the meanings of rumour in the Oxford English Dictionary: A corpus-based approach		
開 催 場 所	ポルトガル・シントラ・ホテルVila Galé		
渡 航 期 間	2019年9月25日 ～ 2019年10月5日		
成 果 の 概 要	<b>タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料</b> <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助 成 金 の 使 途 内 訳	航空券代・国内旅費(一部)	240,000円
		宿泊費(一部)	35,000円
研究集会参加費(一部)		25,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 無事に研究発表を終えることができ、また多くの国々の研究者と、有意義な情報交換を行うことができました。ありがとうございます。		

## 成果の概要／家入葉子

### 1. 「21 世紀のコンピュータ辞書学」について

本研究集会は、展開が目覚ましい近年のコンピュータ技術を利用して辞書学の発展を目指す研究者が、最新の研究成果について情報交換を行う場として位置づけられている。2009 年からヨーロッパを中心に 2 年に 1 回の頻度で開催されており、2019 年はコインブラ大学の企画運営で、ポルトガルのシントラで開催された。

この研究集会の特徴は、何といたっても参加者の多様性である。テクノロジーと辞書学という 2 つの軸を維持しながら、一方で扱う言語やその時代、方法論に制限はないので、今回の研究集会でも約 30 か国の研究者が集まり、口頭発表、ポスター、ワークショップ等に参加した。開発された（あるいは開発中の）電子辞書等を実際に試してみることもできた。筆者は、英語についての研究発表を行ったが、同じセッションにはロシア語の辞書についての発表が組まれているなど、学際性の高さを活かすための工夫がプログラムにも見られた。

同時に、自らの研究との関連分野においても、他の研究者との交流から得るところは大きかった。筆者は *The Oxford English Dictionary* の定義に言及しながら、英語の *rumour* の意味を中心とした史的变化についての報告を行ったが、研究集会には極めて関係の深い Oxford University Press や Cambridge University Press の辞書編纂部の関係者も参加していた。*The Oxford English Dictionary* の今後の展開方針を実際に聞くことができ、Cambridge University Press の辞書関係者とは筆者の研究報告について意見交換を行うことができた。

### 2. 研究報告「『オックスフォード英語辞典』の *rumour* の意味の分析—コーパスの利用から」について

「うわさ」は本質的な社会現象であるが、英語の *rumour* は借用語（外来語）である。*The Oxford English Dictionary* の定義を検討すると、その発達過程でいくつかの顕著な意味変化が起こっていることがわかり、これを具体的なデータで検証し、そのプロセスを明らかにするのが本研究の主要な目的である。より具体的には、現在では使われなくなったとされるものに、*rumour* の *renown, reputation* に相当する肯定的な意味、*clamour, noise* などの音量の大きさを感じさせる意味がある。*The Oxford English Dictionary* に過去の文献からの例はあがっているが、いずれも現在は廃用とされている。

本研究では、近年オンライン上で検索が可能となった Early English Books Online Corpus から、*rumour* が本格的に定着してきたと思われる 16 世紀のデータを取り出して分析し、その使用状況を現代英語（21 世紀）のものと比較対照することで、*rumour* の歴史的变化を追った。分析の対象としたのは、16 世紀のデータ、21 世紀のデータを合わせて、約 3,000 例の *rumour* である（ただし、21 世紀のデータについては、Corpus of

Contemporary American English を分析した家入 (2019)\*をもとにする)。研究方法は、rumour がどのような動詞、形容詞、名詞と共起するかを計量的に観察し、そのコロケーションから rumour の意味用法を探るものである。

調査の結果、先に述べた rumour の用法の変化は、おおむね文献資料に見られる変化と合致することがわかった。たとえば、21 世紀の rumour では肯定的な意味合いが薄れてしまったためか battle、beat down、kill などの否定的な動詞との共起が顕著であるが、16 世紀の rumour は必ずしもそうではない。一方で、rumour はどの時代にも「移動をともなう物理現象」として捉えられているようで、come、spread などの動詞とのコロケーションは、時代を超えて広く観察できる。時代とともに「音量」が弱まってきた点についても、16 世紀の英語では現代英語と異なり、たしかに loud rumour、clamorous rumour などの「騒がしい」意味の形容詞とのコロケーションが観察できた。

この他にも、本研究での新たな気づきとして、rumour monger や rumour mill など、rumour が名詞を修飾する定型表現が 16 世紀の英語では、まだそれほど多く発達していないことがわかった。また 16 世紀英語では、rumour の約 99 パーセントが名詞の rumour であり、rumour の動詞としての使い方もあまり発達していない。動詞としての rumour は、現在でもそれほど頻度が高いとは言えないが、現代英語の顕著な傾向としてその使用が受動態に限定されているという点がある。16 世紀については取得できた例は少ないものの、例文の中に能動態のものが少なからず含まれていた。この点も、新たな気づきである。現代英語の rumour が受動態で使用される背景には、rumour というものの性質上、そもそもどこから発したものであるかを特定できない場合が多いことがあるものを考えられる。しかしながら 16 世紀英語では、rumour が比較的抵抗なく能動態で使用されていることを考えると、この点も、rumour の重要な変化の一つと考えることができるかもしれない。動詞 rumour は、特定の個人を主語にすることができた。すなわち、rumour は特定の個人によって作り上げることができる性質のものであった可能性が高い。

最後に、コーパス言語学の手法を用いた語彙の言語学的分析が、辞書の記述、とりわけ史的辞書の記述にどのように貢献できるかを議論して報告を終えた。

\* 家入葉子. 2019. 「現代アメリカ英語の rumor—Corpus of Contemporary American English の分析から—」 住吉誠・鈴木亨・西村義樹 (編) 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』 pp. 18-34. 東京：開拓社.